

①

「かぼちやのたね みつつ」

脚本・画 きくち かずみ

(まこと)

「おばあちゃん、今日のおかずは かぼち
やっ。」

(おばあちゃん)

「そうよ」

(まこと)

「ぼく かぼちや きらいだ!」

(おばあちゃん)

「コロッケにするから、おいしいよ」

(まこと)

「あれ?おばあちゃん、かぼちやの種をいつ
も みつつ、とっておくんだね」

(おばあちゃん)

「まことちゃん、よく見てたのねえ」

(まこと)

「どうして、取っておくの?」

— ぬく —

演出の参考

物語は祖母と孫の対話
で進んでいくので演じ
分けの工夫をする。

受け流す様に。

②

(おばあちゃん)

「それはね、おばあちゃんのお母さんとの
約束なの」

(まこと)

「へえー、へんな約束だね」

(おばあちゃん)

「そう、変でしよう。でもお話を聞くと、
ちっとも変じゃないの」

(まこと)

「うわあ。ぼく、そのお話、とっても聞きた
い」

(おばあちゃん)

「じゃあ、お話しようか」

— ぬく —

③

(おばあちゃん)

「今から70年も昔のこと―

ひいばあちゃんが、今のまことちゃんと同じ
くらいの年ごろかな。

日本は戦争をしていたの。

戦争が長くなって―

だんだん負けてきて―

毎日のように空から爆弾を落とされたの」

(まこと)

「空から?じゃあ逃げられないねえ」

(おばあちゃん)

「そうよ。だから、たくさんの人が亡くなっ
たり、けがをしたの」

(まこと)

「ひいばあちゃん、大丈夫だった?」

(おばあちゃん)

「ええ、とても運が良かったの」

―ぬく―

(おばあちゃん)

「一番困ったことは、

食べるものがないこと。――

お店も畑もたんぼも丸焼けになってしまったからね。

ひいばあちゃんの家族も食べるものがなくて困ったそうよ。

原っぱのタンポポ・ナズナ・ツクシ・

スカンポ・オオバコ・ハコベまで取ってね、

食べれるところは、花や葉、茎や実、根っこ

まで食べたのよ」

(まこと)

「ふうーん、大変だったんだね」

――ぬく――

画面左からの草の名前
つくしの横はスギナ

⑤

(おばあちゃん)

「ごちそうは、フナやカニやへびやカエル」

(まこと)

「ゲエーッ。まずそう」

(おばあちゃん)

「せみやイナゴも食べたって」

(まこと)

「ぼく、虫だめえ」

(おばあちゃん)

「生きていくためには、何だって食べたの。
みんないつもお腹をすかせていて、白いごは
んの夢をよく見たんだって。」

(すこしの間)

ある日、外国に戦争に行っていた、ひいばあ
ちゃんのお父さんが、病気になってね、日本
に帰ってきたの。その時、ひいばあちゃんの
お母さんは、納屋からわらにくるんだものを、
大切に出してきたんだって」

(まこと)

「何だったの？」

— ぬく —

⑥

(おばあちゃん)

「か・ぼ・ちゃ」

(まこと)

「かぼちゃ？」

(おばあちゃん)

「そう。それでね、お母さんは『これが最後のごちそう』と言って、泣きながら、料理をしたんだって。

それは、それは、おいしいかぼちゃ汁で、病気のお父さんも、いっぱい食べてくれたそうよ。もちろん、種も干して煎って食べたの」

— ぬく —

区切って発音する

ふしぎそうに

⑦

(おばあちゃん)

「その時、干してあったかぼちやの種

みつつを、ひいばあちゃんね・・・

そつと、ポケットに入れたんだって」

(まこと)

「どうして？」

(おばあちゃん)

「種を庭に埋めてね、『今度、芽が出るときは、

白いごはんになってください』ってお祈りし

たそうよ」

— ぬく —

ひみつつぽく

(おばあちゃん)

「その後、大きな空襲があつてね。とうとう、ひいばあちゃんの家は焼けてしまったの」

(まこと)

「わあー かわいそうに・・・」

(おばあちゃん)

「でも亡くなった人が、どこの家にもいたからー

家族全員命があつただけでよかったと喜んでいたそうよ。

それからしばらくしてー

ひいばあちゃんのお父さんが焼け跡で、最初に見つけたの。『あれっ、これは、何だ?』って」

(まこと)

「何を見つけたの?」

ーぬくー

空襲

空からの爆弾攻撃のこ
と

『』は男性の声を模して
演じる

⑨

(おばあちゃん)

「かぼちやの芽。みつつ出ていたんだってー。家族みんなは、その芽を見て とても元気が出たの。種をまいたひいばあちゃんは、みんなにほめられたそうよ。

種まで食べずに、全部まいておけばよかったなあーって。

久しぶりに、みんなで大笑いしたんだって」

(おばあちゃん)

「戦争が終わった頃、かぼちやの実が8個とれたの。ひいばあちゃんは、かぼちやがお米にならなくて、たいそうがっかりしたそうだけど、それからというもの、かぼちやの種をかならず みつつ、取っておくことに決めたんだって。」

(すこしの間)

そして、私が生まれて大きくなった時ひいばあちゃんと私は、かぼちやの種の約束をしたの。

『戦争は、二度としないぞ』

—という思いを込めて、私もかぼちやの種 みつつ取っておくという約束をねっ。」

(終わり)